雑学書庫 知識の記録

音が先に来て、音が残る編集、JカットとLカット（J-Cut and L-Cut）

記事のURL

https://www.gklibrarykor.com/ja/article/14107/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

映画やドラマで、二人が向かい合って話すシーンを思い浮かべてみてください。話している人の顔だけが交互に映ると、会話がボールを打ち合う試合のように硬く感じられますが、話が続いている間に聞き手の表情がそっと映るシーンもあります。その自然さは、たいてい編集から生まれます。 コツは、画面が切り替わる瞬間と音が切り替わる瞬間をあえてずらすことにあります。こうした編集をスプリットエディット（split edit）といい、その中で最もよく使われるのがJカット（J-Cut）とLカット（L-Cut）です。アルファベットの名前が付いた理由は後ほど説明します。 本稿では、映像と音を別々に切る原理から、JカットとLカットの違い、そして二つの技法を使うときに知っておきたいコツまでを順に整理します。 映像と音のずれで場面をつなぐ方法 映像と音を別々に切るスプリットエディット 映像編集で「カット」とは、あるシーンから別のシーンへ移る地点のことです。最も単純なカットは映像と音が同じ瞬間にいっしょに切り替わりますが、スプリットエディットは両者を別々の時点で切り替えます。映像はすでに次のシーンなのに前のシーンの音が残っていたり、音が先に次のシーンへ移っていたりする形です。 トーキー映画が登場して以来、編集者が使い続けてきた技法で、目立たないほど上手な編集と評価されます。観客に残るのはカットが変わったという事実ではなく、